

三木露風研究 新資料草稿「弟の死」をめぐって

和田典子

Rofu Miki's newly-discovered essay manuscript, *The Death of My Younger Brother.*

Noriko WADA

Abstract

The purpose of this paper is to survey *The Death of My Younger Brother*, by Rofu Miki. Rofu Miki is one of the most famous poets in Japan. His poems and nursery rhymes have been enjoyed by many Japanese people.

This essay was probably rewritten two times. The manuscript discussed here is the first draft. The second manuscript was written on the same paper as the first one. The third manuscript was written as a clean copy to be sent to the publisher. But the third manuscript has not been discovered.

This essay was not included in the complete works of Rofu Miki, but was printed as *The Death of My Younger Brother* in the magazine *Kokumin Bungaku (literature for the common people)* in February, 1919.

It expresses deep love for his younger brother Tutomu and is considered masterpiece.

Through this essay, we learn that Tutomu suffered from tuberculosis and came to Rofu's house in Tokyo for medical treatment, but he died approximately 4 months later. During this time, Rofu wrote two commentary books on Hokusai's wood block prints to earn money for his younger brother's treatment. At that time, Rofu was asked to be an editor of children's poetry in the magazine *Akaitori*. However, he declined the offer.

Therefore, it is concluded that he lost an important position in children literature because of his love for his brother.

Key words : Japanese literature Poets Rofu Miki Rofu Miki's newly- discovered essay manuscript
The essay manuscript The study of newly-discovered

日本文学, 詩人, 三木露風, 三木露風の随筆, 新資料研究

- * 1 北原白秋『邪宗門』易風社 一九〇九（明治四二）年三月十五日
 - * 2 三木露風『寂しき曙』博報堂 一九一〇（明治四三）年一月一日
 - * 3 三木露風『白き手の獵人』東雲堂書店 一九一三（大正二）年九月二十五日
 - * 4 三木露風『幻の田園』東雲堂書店 一九一五（大正四）年七月一日
 - * 5 未来社同人『日本象徴詩集』玄文社 一九一九（大正八）年五月三日
 - * 6 三木露風全集刊行会『三木露風全集』全三卷 一九七二（昭和四七）年～七四（昭和四九）年
 - * 7 飛高隆夫『三木露風の随筆』『国文学解釈と鑑賞』第六八卷十一号 至文堂 二〇〇三（平成一五）年十一月
 - * 8 安部宙之介『続三木露風研究』木犀書房 一九六九（昭和四四）年五月
 - * 9 和田典子『三木露風が「赤い鳥」童謡欄の選者を断った理由』『児童文学研究』第三九号、日本児童文学学会二〇〇六（平成一八）年一二月 四九頁～六一頁
 - * 10 郷土資料館（財）霞城館（龍野市龍野町上霞城三〇番）
 - * 11 母のかたは、鳥取藩九千石の家老を務める和田邦之助の次女として生まれたが、藩内の内乱の責任を取り蟄居の身となったため、重臣で子どものなかった堀正・千代夫婦の養女となった。
 - * 12 安部宙之介『続三木露風研究』前出 六六頁
 - * 13 大正七年の日記で、黒革手帳に記されている。黒革手帳は、
-
- 新資料群の霞城館資料の中にあったもの。
 - * 14 『浮世絵板画傑作集解説・北斎派風景画』浮世絵研究会 玄文社 一九三二（大正七）年七月
 - * 15 『浮世絵板画傑作集解説・春章・文調』浮世絵研究会 玄文社 一九三二（大正七）年九月
 - * 16 書簡集 七九 明治四二年六月一〇日付け 引用は『露風全集』第二卷 六六四頁
 - * 17 『白き手の獵人』前出『照應』一四九頁
 - * 18 『白き手の獵人』前出『照應』一四九頁
 - * 19 和田典子『三木露風の新資料研究』科研「三木露風の詩と童謡研究―その童謡観と児童観―」に関わる研究調査報告書参照
 - * 20 『雨窓点滴』に関しては、未だ研究途中なので明確には限定できないが、三の原稿までを含めると、さらに年代は下がると予測される。
 - * 21 『修道院雑筆』新潮社 一九三九（大正一四）年八月

露風の業績の中では、第七詩集『幻の田園』上梓後の詩人としては円熟した頃の仕事で、随筆は大正四年頃から多く書き出していたが、それから四年後の大正八年の作品とあって、手慣れた様子が窺われる。兄弟の情愛がしみじみと溢れる穏やかな心温まる感動的な作品に仕上がりが、小説的な要素が加わり良く構成された珠玉の一品である。弟が養生して縁側で漢詩選などを読んでひねもす過ぐす箇所などは、『幻の田園』に現れる描写の一面を切り取った表現にも相通ずるところがあり、美しい作品でもある。

この草稿の発見で、露風の創作過程が明らかになったと同時に、雑誌発表形では得られなかった様々な情報が明らかになり、弟の死が露風の創作活動に及ぼした影響も浮かび上がってきた。加えて、作品を通して露風の弟を思う気持ちや人柄も浮き彫りにされたと言える。

弟の看病と死は、露風の芸術活動に影響を及ぼした。そのうち三つを取り上げると。第一に、『赤い鳥』童謡欄の選者を断つたが故に、露風の童謡作家としての業績も、北原白秋には及ばず、童謡創作においても他の作家よりも出遅れたこと。

第二に、弟の病が結核であったため、「結核の病人が死んだ家は早く越したがよい」という石橋俊行氏の忠告に従い、家を見もしないで雑司谷亀原の家に引越してしまったこと。こうしてあわただしく『幻の田園』の舞台となった池袋時代の幕が下ろされたのであった。

第三に肉親の死が、露風の宗教心を強く引き起こし、その二年後には、周囲の人々の止めるのも聞かず、北海道函館のトラピスト修道院の招聘を受けてしまったこと。(理由は他にもある

が)

第一の影響の結果、『赤い鳥』童謡欄の選者の席と発表雑誌を失ってしまった露風は、白秋に大きく水を空けられた。しかし、これらの影響など露風の眼中にはなく、むしろ弟の死を心から悲しむ姿が作品にも現れており、仕事よりも家族の愛情を優先した露風の人柄をも示す作品でもあった。

本作品を研究するにあたり、研究許可をはじめ、翻刻掲載の許可を下さった著作権者および関係者の方々に感謝いたします。また、三木露風の新資料研究は、文部科学省の科学研究助成金を受けています。

誌や新聞に発表して稿料を得ていた。結婚後入り用も多くなったであろうから、大正四年頃から随筆を多く書き始めたのも容易に理解せられることであり、その量の多さも頷けるのである。

第二節 「我弟の死」の位相

既に第一節で述べたように、大正八年初頭に書かれた草稿「弟の死」は、随筆としては書き慣れた頃の作品である。

内容は他の随筆と異質な点も多い。本来随筆は自由形態の文章であるから、他の文章との共通点が無くても良いのだが、各自のスタイルは自ずと出るものとして考えると、これまでの露風の言う小論あるいは随筆との相対比較において大雑把な認識であるが、次の点が見いだされだろう。

まず、露風独特の自然描写がない。露風自身の思想や詩に関わることに引きつけられることなく、弟のこののみで筋が通されている。そのことにより、弟の履歴、考え方、性格までもが読者に伝わり、弟像が鮮明になった。

さらに、短編小説のように終盤のどんでん返しは無いものの、「諧謔」という逆説的な要素を加えることにより、作品全体の悲痛感をより深め、弟の死への冷静な対峙とユーモラスな言葉が余裕を感じさせている。その余裕は、静かに本を読んで過ごした療養の日々の描写や、滲みでる兄夫婦の愛情を噛み締めている弟の生活を伏線として浮かび上がらせるものである。更には、弟の履歴を紹介する中に、弟には外祖父の血を受け継ぐ「激しいものがある」と説明しつつ政治派記者としての、異国の地での活躍を描き、静養の日々の穏やかさと対比されて描かれている。これらが、みごとに計算されている点、従来の心

赴くままに書かれた文章と相違している。

草稿「去年のことども」「弟の死」が現実の生活記録的な部分を持つていたのに対し、例えば事件の正確な年月が入っていたり、個人情報記されているなど、改稿後はそれらの部分が削られ、普遍的な表現になっている。虚構部分の増加が、小説への第一歩を踏み出させていると言えるだろう。

その意味で本作品は、随筆の域を歩み出て小説としての要素が幾つか備わりつつある作品と読める。数年後に纏められた『修道院雑筆』には、自称の「短き小説」も収められている。その先駆けとなる要素を充分に備えた作品であると言える。

おわりに

今般、発見された草稿は、松屋製原稿用紙に青の万年筆で書かれ、最初は「去年のことども」という題で、昨年に亡くなった弟の履歴、静養の様子、亡くなる当日の様子などを綴ったものを、同じ用紙に「弟の死」として改稿した原稿である。それは、全集未所収で、『国民文学』大正八（一九一九）年二月号に「我弟の死」として掲載されている。訂正の長さや訂正箇所が多さから、雑誌に寄稿するために、もう一度清書した（「我弟の死」とほぼ同型）原稿が存在したと考えられる。

「去年のことども」「弟の死」から「我が弟の死」への改稿の過程を辿ると、無駄な場所が切り詰められ、効果的な表現になったばかりか、結末には、弟が臨終の床で諧謔的な事を言うという思いがけないシーンを入れることにより「泣き笑い」のペーソスが漂う作品に仕上がっている。

眼前にある野中の木から、葉が一枚一枚落ちてくる。昨日、散歩の帰りがけで、入日が雲の中に輝いてゐた。葉はわけもなく梢を離れて落ちてくる。それはただ有るがまゝに、落ちるところに落ちるといふ風だ。併し、そこに聴きとれぬ深い美しさ。驚異の静けさが重なつてゐる。それに何といふ魅力が漂ふのだ。

「照應」より^{*18}

露風が、一枚の葉や花びらに残された光の色や残像に目を留め、その一片が舞い落ちる音なき音に耳を澄ませ、美の音色や匂いに心酔する姿が立ち上ってくる。露風の場合、詩に付けられた解説や小論は、詩人が何に心を奪われ、如何なる目線でその対象を捉えているかと言う点を明らかにする。極端に切り詰められ贅語を持たない、しかも観念と時間の飛躍の多い露風詩を読み解く大きな鍵と成り得る。それらは、単に詩を読み解く鍵としての機能のみならず、詩の誕生する瞬間のエモーション、あるいは詩人の視線そのものを正確に写し取った情調の流れをも表現している。このような意味に於いて、露風の小論は、彼の作品の中で重要な位置を占めているのである。

再び露風の創作年表に戻ると、露風の『我が歩める道』所載の自筆年表の大正四年には、「又此年、多く随筆を書く」とある。随筆集『雨窓点滴』は、露風が随筆ばかりを集めておいたものを『三木露風全集』第二巻に収めたもので、四四〇頁にも及ぶ大作である。日付けの判明する原稿の早い物は、「大正六年初夏」の「吾歳と春の序」と題するもので、遅いものは昭和四年頃であらうと考えられる。全集解説では、昭和三年とされていたが、最近の新資料研究により^{*19}『雨窓点滴 二』の草稿が発見され、

昭和四年七月三日などの日付の記述された草稿があるため昭和四年頃のものも含むと考えて良い^{*20}。随筆集として纏められてはいるが、詩論あり、友人や弟子或いは自己の作品の序論あり、日記あり、作家論ありという体の雑文集と言える。露風が多く随筆を書き始めたという大正四年頃から、折に触れ発表した小論を集めたものと考えられる。今般取り上げた「我が弟の死」は、大正八年の作品であるから、充分に書き慣れた頃の作品であると見えよう。

露風の業績には、トラピスト修道院の生活を広く紹介した『修道院生活』があるが、同じくトラピスト修道院時代の二冊の随筆もトラピスト修道院の日常生活を知るよすがとなるばかりか、北海道の大自然の美しさが描かれた散文詩のような珠玉の作品が収められている。その二冊とは、日常の雑文集『修道院雑筆』^{*21}や宗教的エッセイ(露風自身の言葉)『神への道』である。前者は、大正四年から昭和一三年間に書いたもので、主にトラピスト修道院での生活が綴られている。その序によると「手紙、短き小説、感想文、日記、随筆、演説の草稿文」などの雑文集で「即ち雑筆の名のある所以である」と露風自らが記す如くである。

後者は、諸処の新聞や雑誌発表作品に講演の草稿を加えて編まれたものである。

その他に、『露風全集』第二巻には、「諸雑誌発表作品」「補遺編」に多くの随筆が所載されている。また、新資料群の中の自筆ノートにも随筆が散見される。

日々の糧を、創作の原稿料や短歌・詩の創作欄の選者料に頼っていた露風は、詩の創作よりも安易に書ける日常の雑文を諸雑

雑誌発表形

あ、何といふ諧謔！何といふ笑であつたぞ。

第一草稿には「今死なうとしてゐるのに」が入っていたが、第二草稿では落ちてゐる。説明的な部分を削除することによつて、対句になり、リズムが出た。

雑誌発表形では「悲劇」が「笑い」に変わり、強調の「ぞ」が使用され、反語となり強調された文章となった。「何といふ悲劇であつたか！」という大仰な言い回しではなく、「何といふ笑であつたぞ。」と軽く表現しながらも、その泣き笑いの心中の深みが増している。

死に冒されていく弟の手と指を揉み、足を揉んで、何とか生氣を取り戻して欲しいと願う肉親の行動と、死と冷静に対峙する弟の静かな覚悟が、短く切り詰められた文章に深い陰影を伴つて現れている。さらにユーモアのある弟の最後の言葉が一層悲しみを増幅させる。兄に対して軽い憎まれ口をたたく弟の心情は、それだけ兄への親密度の深さを表現し、義姉への感謝の気持ち表現との対比においても秀逸である。短編ではあるが、しみじみとした情感溢れる作品に仕上がっている。

第三章 露風随筆に於ける本作品の位相

第一節 露風の随筆の創作歴

露風の創作年表を概観すると、俳句から短歌へ、そして詩へと展開したのは他の大方の作家と同じである。島崎藤村や佐藤

春夫などは小説家へと舵をきり、日本の近代文学の潮流は、小説へと流れていく。露風も若い頃、「桃代さんの日記」「千本浜の宿」「悩」などの小説を書いてみたが、自身で「書き足りないヘンテコなものです」*16と、内海信之に書簡で認めるように、小説には進まず韻文学に踏み留まった。露風の小説は、私小説に近く、実生活の描写が大部分を占めている。小説としての構成力や伏線への配慮が欠けている点などが、成功しない理由であつたのだろうか。しかし、部分的な自然描写にかけては、詩人としての卓越した自然照観に基づく感性が溢れた良い文章である。それらの文章の美しさは、詩の解説や随筆的な文章に見ることができる。

例えば、露風の最高傑作とされる『白き手の獵人』は、詩論と作品集と言える。詩作品の間に、「湖畔より」「冬夜手記」「蠱惑の源」「照應」「芭蕉」「物照」「詩的な物」などの散文が収められている。露風はそれらを「小論」と書き「エッセー」とルビを振っている。内容的には詩論であるが、或る部分は、日常に感じる詩への原理であり、自然への観照であり、思想であり、昂揚する情感である。そして、それらは散文詩とも読める美しさを備えている。露風の内的視線を捉えている箇所を数行引いてみる。

人の影は穩かになり、稍紫がかつた銀灰色の靄は、既に河口の方に迫つて居る。帆とおぼしきものが空中に影を築き、沈黙した白日の風がそこで憩んで居る。消え去つてしまつた筈の太陽は、しかしまだ岸の柳に、赤い幽霊を残すのである。

「照應」より*17

を」というように作品としての一般化を図っている。

傍線②から勉は六年の春頃から病氣を得ており、露風はそれを承知していた形になっているが、実際問題はどうかであったかは不明である。雑誌発表形ではこの辺りが整理され、「八月」という具体的な数字も消されている。上京する経緯や具体的な日時には、実際とは多少のずれがあるが、モデルとの一致は必要ないわけであるから問題はない。むしろ、虚構性が改稿ごとに増加していることに着目したい。

傍線③は、草稿では欄外に書かれ訂正が多い箇所であるが(写真4参照)、雑誌発表形では次のように改稿されている。

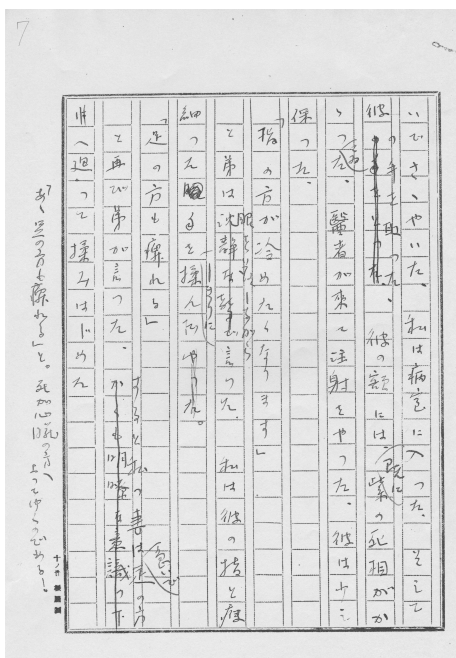


写真4 草稿「弟の死」の欄外訂正のある頁

「あ、足の方も痺れる。」

とふた、び弟が言った。ああ死が心臓の方へのぼつてゆさつ、あるのだ？

となっている。「のぼつてゆさつ、ある」の「さ」は明らかに誤植であろう。文末の疑問符も、第二草稿で感嘆符が書かれているので、露風の方の創作意識としては感嘆符の場面であり、雑誌側の誤植と考えられる。

第三節 改稿による作品の深化と作品鑑賞

本作品の最も感動的な部分は、弟が死に逝く最後の部分であるが、弟のユーモラスな発言により、「泣き笑い」というペーソスが、作品に一層の陰影を与えている。その素材と構成の巧みさが、改稿により深みを増していく過程を分析し鑑賞したい。

弟に死相が出ている場面である。死が全身をまわり、心臓に這い登っていく。何とかその生をつなぎ止めようと、兄は、弟の指とやせ細った手をさすってやる。足まで痺れが来て、義姉は、急いで足下に廻って足を揉む。悲痛感が漂う状況の中、苦しい息の下で、弟は姉に感謝の言葉を述べた後に「兄さんの方は按摩が下手ですね」と笑いながら続けた。そのユーモア溢れる言葉を兄は何と聞いたであろうか。

このクライマックスのシーンを、露風は二度書き直している。第一草稿・第二草稿と雑誌発表形の違いを並列して比較してみよう。

第一草稿

あ、何といふ諧謔！今死なうとしてゐるのに。何といふ悲劇であつたか

第二草稿

あ、何といふ諧謔！何といふ悲劇であつたか！

後にはもう永久に歸って來なかつたのである。

第二節 草稿の注釈

書き出しの一句は、読者を引きつける働きが強いために、文学に於いては重要視される。特に短い随筆での冒頭の二―三行の重要度は高いと考えられている。露風も第二詩集『廢園』の代表詩「去りゆく五月の詩」の冒頭を、

われは見る。

廢園の奥、

折ふし音なき花の散りかひ。

風のあゆみ、

静かなる午後の光に、

去りゆく優しき五月のうしろかげを。

と歌い、わずかな言葉で晩春の廢園のけだるい雰囲気や廢園の奥を覗きたくなる衝動を読者に与えている。他の作品傾向からも、冒頭には気を遣う作家であると見られる。

その冒頭部分の数行を使って露風は、昨年を振り返ると最も印象深い出来事は弟の死であったという。

この（年）年私は弟を失くした、大正七年といふ年を振り返って見ると（消 私には）他の事は消えてしまつて弟の死だけが強い強い印象を私の心（胸）にとめてゐる、

書き出しは「この年」という指示語から始まっている。「こ

の」を指す語は、それ以前にはなく、次の句の「大正七年」であることが、読み進めると理解される。倒置文によつて「私は弟をなくした」を強調し、それは、次の「他のことは消えてしまつて」「強い強い印象を私の心にとめてゐる」に続くことによつて、その印象深さが増幅されている。さらに、傍線②の「実に」という語が、第二稿時で加筆され、雑誌発表時には、同行の「弟の死だけが」の直前に移動している。つまり、「実に」をより効果的な位置に置くために思案した形跡が残っている。

文学人ならば、大正七年と言えば『赤い鳥』の創刊を思い浮かべる。しかも、その童謡欄の選者の依頼まで受け、新しい童心童謡という形態に苦勞しながら童謡創作をした露風であった。にも関わらず、それらのことは「消えてしまつて」いるという。第一稿の題が「去年のことども」であるから、大正七年の出来事を書くとしたのであろうが、去年のことを振り返つて一番印象に残ったことが弟の死であつたと言うのである。童謡を創作し始めたことでもなく、『日本象徴詩集』の上梓でもなかった。

この冒頭を読むと、後に童謡が大流行した頃―露風が『赤い鳥』の童謡欄の選者を鈴木三重吉が露風にも依頼してきたという内容の随筆『赤い鳥』のことども」を書いた頃―に比べると、ずいぶんと童謡に対して執着がなかつた書きぶりだと感じられる。それだけ、露風の弟の死に対する悲しみが深かつたと言えるだろう。

傍線部分①「大正七年といふ年を振り返つて」は、雑誌発表時には「大正七年」という具体的な数字を省き「その一年の事

弟は初め美術を志望してゐたが家の事情で美術の方を諦めねばならなかつた、而して地方の銀行に勤めてゐた——(私達の祖父は其の銀行の頭取であつたから)——併し祖父が死んでから弟は間もなく支那へ渡つた、何か(消 ○○劃第一に) 国家の為に盡さうといふ考えが常に(消 あつたらしかつた) 彼の心の中にあつたらしい、(消 支那では上海の新聞社や北京の連合通信などにゐたが) 一體私たちの(消 母方) 外祖父は勤王の士で自殺した人(消 だ) である。で弟には然ういふ血が幾分傳はつてゐたものと思はれる。支那では上海の新聞や北京の連合通信などの記者となつて働いてゐた。(消 が、) 久しく音信が絶えてゐるかと思ふと或時は揚子江を遡りつゝ、簡単な葉書を其處から寄越したりした。青島で重態であるといふ報が突然私を驚かした。が間もなくその病院に居る内に幾分良くなつて、長崎迄歸つて來た。それが六年の春の事で支那事情に就て書いた彼の論説の出でゐる新聞が時々近親の者の許へ來た。が依然として(消 病は一時小康を得てから彼を恢復出來ないまでに悪くした)「生きてゐる間に何か形のある仕事をしたいと切に思ひます」と云つて來たりした。漸う／＼彼は私のすゝめに従つてこの八月の中旬に東京へ療養に出て來た。「瘡せてしまふたな」と私は彼を見るなり言つた。そして相黙して泣いた。

池袋の私の(消 寓) 住居へ來てから、弟の健康は一時恢復して來るやうに思はれた。彼は醫藥を樂んだ。それから靜穩な(心持ち) 生活を樂んだ。ある時弟の部屋があまり靜かなので(消) 何をしてゐるだらうと思つて私は見に行つた。すると彼は日當りのいゝ、椽側と座敷との間の所に靠れて唐宋詩醇とか増廣詩韻全璧とか云ふ本を繰ひろげて見てゐた。(消 が、眼

をあげて私を見て) 退屈しないかと私が云ふと「なあに、かうして遊んで居ます」と言つた。それ(消 ほど彼の心は靜かだつた。)が如何にも靜かな氣持でゐるらしかつた。が、一時良いと思つたのも小康を得たに過ぎなかつた。それから彼の病氣は次第に悪くなつていつた。あゝ彼の苦痛はどんなに激しいものであつただらう！(消 それを見た) 主治醫の外に北里傳研の醫師も立會つて呉れたがもうどうしても可けなかつた。

九月十六日の朝「若し用事があるなら今のうちに済してをいて下さい」と弟が(消 云つた) 落付いで言つた。それから「障子をあげて下さい。そこらを綺麗にして下さい」と言つた。午後である。妻が緊張した顔をして私の側へ來て、「兄さんにお別れだと言ひます」と急いでさゝやいた。私は病室に入つた。そして彼(消 の手をとつた。)の手を取つた、彼の額には既に紫の死相がかかつてゐた。醫者が來て注射をやつた。彼は少し保つた。

「指の方が冷めなくなります」

と弟は(消 沈靜な聲で) 眼を落しながら言つた。私は彼の指と瘡細つた手をしきりに揉んだ(消 でやつた)。

「足の方も痺れる」

と再び弟が言つた。(消 かくも明瞭な意識の下に) すると私の妻は急いで足の方へ廻つて揉みはじめた「欄外」あゝ足の方も痺れる」と。死が心臓の方へ上つててゆくのである！」

「有難う、姉さん。(消 大変い、)」

と弟は妻に感謝して「兄さんの方は按摩が下手ですね」と笑ながら言ひ足した。あゝ何といふ諸諳！(消 今死なうとしてゐるのに!) 何といふ悲劇であつたか！かくして我弟は其半刻の

遅れた半年を取り返すべく創作に没頭できる時間を作るために、丁度区切り良く二冊目の解説ができたところで職を辞したと考えられる。

第二章 草稿の翻刻と注釈、および鑑賞

第一節 第二草稿「弟の死」翻刻

第一草稿「去年のことども」に加筆修正した草稿を、第二草稿「弟の死」と考え翻刻する。原稿は写真3参照。

翻刻にあたっての付記

- 一、版刻は、新発見された草稿「弟の死」を基にしている。
- 一、(一)内は、判読できる限りでの第一草稿「去年のことども」、(消 ○○)は、消されている文章を表す。
- 一、「つ」「つ」は混同されて使用されているので、そのまま記している。なお、雑誌発表形はすべて「つ」で統一されている。
- 一、漢字・仮名遣いは、できるだけ原文に近いものを使用しているが、変体仮名に限り現代仮名に改めた。
- 一、傍線は雑誌発表形とは異なる部分に付けている。本稿では特に問題な点に番号を振り、次節で注釈を付けた。その箇所が多さから、第二草稿と雑誌発表形との間に清書原稿が存在したと考えられる。傍線はその証左のためでもある。

版刻 弟の死（去年のことども）

三木 露風

この(乍)年私は弟を失くした、大正七年といふ年を振り返って見ると(消 私には) ③ ① 実に他の事は消えてしまつて弟の死だけが強い強い印象を私の心(胸)にとどめてゐる、その時の事を追想するさへ涙なしにはゐられない。

私は幼ない時分からこの亡くなつた弟を非常に愛してゐたものだ。私には此感情をはつきり説明は出来ないが、二人とも小さい時分に母に別れてしまつたので、そのあはれみが兄弟の情を一層深くしたものであるかも知れない。彼が長じてからも彼は二十七歳で死んだが―私が彼に対する感情は幼年に對すると同じやうなものがあつた、また彼から云つても然うであつたらうと思ふ。

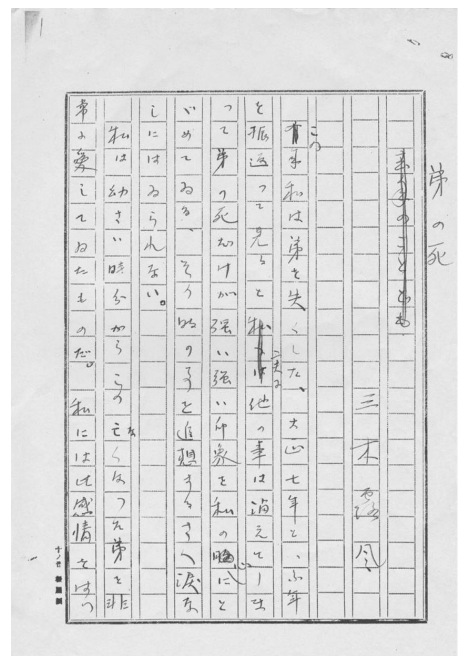


写真3 草稿「弟の死」(「去年のことども」)

作品では「私のすゝめに従つてこの八月の中旬に東京へ療養に出てきた」と表現されているが、五月二十日日記では、「弟より來書。病氣もまことに悪しき様子なり」とかなり切迫した状況。ようやく六月六日日記「就眠前、門司の弟と〇部とに手紙を書く。」という過程をへて勉を呼び寄せている。

この間、露風は、板画解説の仕事を紹介して貰い、六月二日に渡辺板画舗を訪ね主人庄三郎氏と面接の後、「隔日に店へ出る」、「報酬は三十円、外に電車賃を支払ふとのことなり」という条件で仕事を引き受け、経済的な基盤を確保している。この時の仕事により『浮世絵板画傑作集解説・北斎派風景画』*14と『浮世絵板画傑作集解説・春章・文調』*15を執筆した。奇しくも、最初の解説書の出版は、『赤い鳥』の創刊と同じ七月であった。

日記からも読み取れるように、鈴木三重吉が来訪したであろう五月の末から六月初旬頃、家計を支えるため慣れない勤めをしながら、未来社企画の『日本象徴詩集』を発行する準備をしていた露風には、未知の子どもの雑誌に力を注ぐ余裕などなかった。当時の日記を見ても、「夜眠れない」という記述があり、神経的な病を抱えていた露風にとっては辛い時期であったのである。その結果、『赤い鳥』童謡欄の選者になつてくれ」という鈴木三重吉の依頼を断り、作品だけは送ると約束しつつも、創刊号には間に合わなかった。最初の童謡「毛蟲採取」は、『赤い鳥』第二巻の八月号に掲載されたのである。

一方、『赤い鳥』童謡欄の選者を引き受けた北原白秋は、『赤い鳥』の成功と隆盛と共に、童謡界の第一人者として童謡界をリードしていく。露風は『赤い鳥』に作品を寄稿しても、あく

まで他の寄稿作家と同じ立場であった。鈴木三重吉は、露風に紹介されて西条八十を訪ね、白秋と共に『赤い鳥』の童謡欄を牽引して欲しいと依頼した。それに応えて文学から離れていた八十も復帰し「かなりあ」などの圭作を次々に発表した。童謡欄の選は、あくまで白秋が掌握していた。白秋不在時、八十が交代した時もあったが、白秋との間に亀裂が生じ、結局、年若い八十は『赤い鳥』を離れた。

露風も、童謡発表雑誌が『赤い鳥』しかない間は『赤い鳥』に発表していたが、次々に類似雑誌ができ、『赤い鳥』に対抗できる雑誌『こども雑誌』が大正八年七月に創刊されて以降は、『赤い鳥』には寄稿せず、『こども雑誌』に毎号二編の作品を掲載し、九月からは童謡欄の選者となった。『こども雑誌』では、毎号意欲的な作品を発表し、象徴詩人としての技量を遺憾なく発揮した。しかし、『こども雑誌』はわずか一年ほどで終刊（九年七月）してしまう。露風は発表の場を『少年倶楽部』『良友』『檉の実』などに移さざる得なかった。

このような未来を予想だになかった露風は、鈴木三重吉の依頼を断り、弟のために新たな仕事を見つけ、新妻の仲に経済的な負担をかけることなく弟を呼び寄せたのである。勉の病気は、結核でかなり進行していたため、北里研究所の医師にも診断を仰いだが手遅れで、大正七年九月一六日に亡くなった。

弟の死去に伴い『浮世絵板画傑作集解説・春章・文調』を書き上げた露風は、仕事を辞め童謡創作に没頭する。安部は「露風は勤めをやめたくてしようがない」「きちんと勤めることなど露風の性に合わないことだった」と露風が仕事を辞めたことと理由を挙げているが、それに加え、白秋や他の童謡作家から出

四月一七日の来書では、門司にいる弟の勉は、病気で様態はかなり悪く、上京したいと言ってきている。その身体も案じられる。両親は離婚し、兄弟は、祖父に引き取られたが、勉とは一六歳の秋に別れたままで、兄らしいこともしてやれずであった。両親にはそれぞれ新しい家族があり、父からも母からも見放された兄弟であったなら、詩人として成功している兄を頼って上京したいと言ってくれば、引き取って療養させてやりたいと思うのが人の情であろう。露風はその思いを雑誌稿「我弟の死」に「私達がまだ幼ない時分から此亡弟を非常に愛した」「二人とも小さい時分に母親に別れてしまったので、多分そのあはれみが兄弟の情を一層深うした」と述べている。

しかし、結婚したばかりの新居に、結核の弟を引き取り養生させるのは容易ではない。文学以外に働くすべを知らない露風であったから、詩人としてかなりの名声を得ていても、詩の創作だけでは十分な生活は成しえなかった。日記に記されているように、貯えはなく、肝油ドロップスを買うに行くにも、露風の大島と引き替えにしなければならなかったのである。

どうしたものかと考え倦ねていたが、板画解説の仕事を紹介され六月一日に承諾し、二日に店主と会い、働く条件など具体的に決めている。定まった収入のめどが立ち、六日には、弟に手紙を書く。東京に来るようにと勧める内容であったと予想される。

今回の草稿「弟の死」によって、安部が記した記述や、黒革手帳の日記の記述以外にも新情報が幾つか得られた。

勉は、「初め美術を志望」してゐたが、家の事情で諦め、制が頭取をしていた百十四銀行（現・三井住友銀行龍野支店）に勤め

てゐた。」制が亡くなった後（制の死は大正二年）、間もなく支那（中国）に渡った。新聞記者になった理由は、「何か国家の為に盡さうといふ考えがあつた」と、露風は述べ、その性質は外祖父和田邦之介（鳥取藩家老）が勤王の士であり、因幡二十士事件にかかわっていたので「弟には然ういふ血が幾分傳はつてゐたものと思はれる」と説明している。

さらに、記者としての活躍を次のように記している。

支那では、上海の新聞や北京の連合通信などの社員となつて働いてゐた。久しく音信が絶えてゐたかと思ふと、或る時は、揚子江を遡りつゝ、簡単な葉書を其處から寄越したりした。

ところが、青島で病に倒れ重体であると知らせてきた。「突然私を驚かした」とある。病院で静養する内に幾分良くなったので、「長崎迄帰ってきた」。露風の四月十七日の日記には、「勉門司にあり。病軀を抱いて窮迫せる旨云ひ來」*13とある。長崎というのは、創作上使用したのか、或いは、長崎から門司へ移ってきたのかは不明であるが、安部の記述にも長崎とあるので、長崎から門司に移ったと考えるのが順当であろうが、現時点では明確ではない。ともかく、日本に戻り養生していることを知らせ、「上京すべしと云ひやる」と、日記にあるように上京を希望してきた。

雑誌掲載形「我弟の死」では、この辺りの詳細は省かれているが、第二稿「弟の死」には「それが昨年の春のこと」と具体的に書き加えられ、雑誌掲載時には再び削られている。

安部は「支那へ行き新聞社に勤めていて二年して病氣にかかり引揚げて、長崎から手紙を寄越した」と記している。「すぐに露風を頼りたい」と言ってきたので夫人の薦めにより上京したようであるが、この辺りの事情が、第一次発見の新資料の中にあつた黒革手帳の中の大正七年に書かれた日記から詳しく読み取ることができた。(写真2参照) 詳細は和田典子「三木露風が『赤い鳥』童謡欄を断つた理由」にあるが、ここでは日記の抜粋を掲げておこう。(○は不明字)

四月十七日

勉門司にあり 病軀を抱いて窮迫せる旨云ひ来る。上京すべしと云ひやる。かれこれさまざま憂ひて終日樂まず。

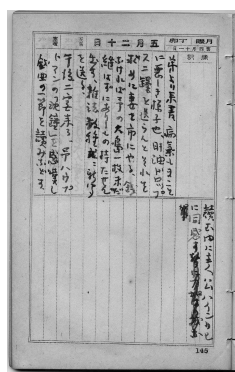
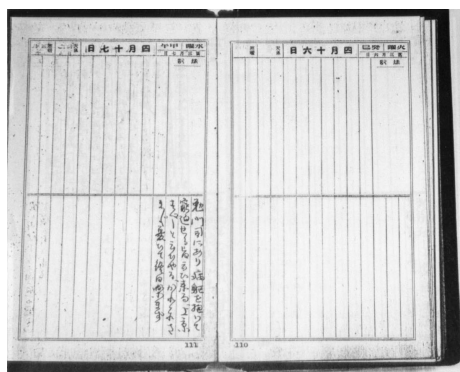


写真2 上 4月17日付
下 5月20日付

五月二十日

弟より来書。病氣もまことに悪しき様子也。肝油ドロップス二罐を送らんとそれを求めに妻を市にやる。錢なければ予の大島一枚未だ縫はずにありしもの持たせて出す。雑誌数種○に新聞を送る。

六月一日

羽仁君来車、北斉の赤富士と波との板画二枚を贈られたり。而して板画舗渡辺に余を推奨して北斉派の解説を書くを手初めに関係せん事を求められたり。余も勉強になることなり。条件等も極めて寛大なれば承諾す。二人して錢湯にゆき喫飯して神田にゆく。

六月二日

午前羽仁君を訪ひ 更に同伴して渡辺板画舗を訪ふ。主人庄三郎氏は感じのよき人也。隔日に店へ出る事、時間は朝にても午後にても自由の事、報酬は三十円、外に電車賃を支払ふとのことなり、余はこれにて月々定りたる金の入る身となりたり

六月六日

坂本を訪ひ閑談す。灰野より岡崎八丁味噌を贈り来す。礼旁々二夕刻灰野を訪ふ 就眠前、門司の弟と○部とに手紙を書く。中央文学の詩も選し了る。不眠症なりと見え暁雀の鳴くまで眠られざりき

月号に「我弟の死」として掲載されている。掲載頁が、本作品分のみ読み取れないが、他頁から数え合わせると、一八・九頁見開き分である。

第二草稿と、雑誌発表「我弟の死」には異同があり、草稿では「大正七年といふ年を振返つて見ると」が「その一年の事を振顧つて見ると」に、一〇字以上の訂正がされていることや、訂正箇所が多さから、校正の範囲では無理であろうと考えられる。従つて、雑誌に寄稿するために、もう一度清書した「我弟の死」とほぼ同型―原稿が存在したと考えられる。

第三節 新資料から読み取る 三木勉(弟)の履歴

三木勉(写真1)は、一八九二(明治二五)年五月二二日、兵庫県揖西郡龍野町に父節次郎、母かたの次男として生まれる。

三木露風の三歳下の実弟である。露風五歳の時に、両親は離婚した。露風は跡取りなので三木家に残し、母は鳥取の実家に勉を連れて帰った。翌年、かたは勉を連れて養父母堀正*11を頼つて上京する。勉を堀夫婦に預け、看護学校で学ぶが、その苦学の様子を知った祖父の制が上京して、勉を引き取り龍野で養育した。露風は小学生時代と中学一・二(一一月まで)年生の間、



写真1 弟の勉

制の屋敷で弟と共に過ごした。その屋敷には伯父の家族がおり、二人の年上の従兄弟(裕之、益三)がいた。露風は、従兄弟や

近所の友人達と、小学生時代は「白紫会」、龍野中学校時代は詩歌中心の「緋桜会」、俳句中心の「柿栗会」を結成し、謄写版刷りの会誌を発行した。弟の勉も幼少期から露風の影響を受け、それらの会にも参加していたであろう。

長じて勉は新聞記者になった。露風の弟子の安部宙之介は『続三木露風研究』「露風の生活の中で」*12で弟について次のように記述している。少し長くなるがここに掲げてみよう。

露風の弟勉は一度上京したが再び支那へ行き新聞社に勤めていて二年して病氣にかかり引揚げて、長崎から手紙で、神戸の父や義母の処へも寄りたくない、すぐに露風を頼りたいといつて来たとき、露風がどうしようかと云うので、親の処よりもこちらへ来たいというのなら、来させなさいと夫人はすすめた。だが病状は進んでいた。暑い間を病んだ。近所の医者では、はつきり分らないので北里研究所の或る博士に診て貰うと、あと幾日も持たないといわれた。そして、大正七年九月十六日死亡した。

この病人の弟が来たので露風は稼がざるをえなくなった。それ迄、毎日、友人を訪ねたり、ぶらぶらして、一年に一作位しか書かなかつたこともあったが、浮世絵版画の渡辺正三郎氏の処へ一日置に通い、そこで書いたのが「北斎風景画派の解説」「春章・文調の解説」だった。だが、そこは日本橋の二階家で、暑くてたまらないので、露風は勤めをやめたくてしようがない。弟が死去するとすぐやめてしまった。きちんと勤めることなど露風の性に合わないことだった。

雑誌発表の「我弟の死」は、『三木露風全集』*₆にも所載されていず、先行研究はない。

随筆についての論考も少なく、飛高隆夫が「三木露風の随筆」*₇に「雨窓点滴」を中心に概説しているが、参考にできる箇所はなかった。

勉に関しては、安部宙之介『続三木露風研究』*₈「露風の生活」に数行の記載があり、参考にした。

また、弟の療養費を稼ぐために、『赤い鳥』の童謡欄の選者を選ったことに関して、和田典子「三木露風が『赤い鳥』童謡欄の選者を選った理由」*₉に、当時の露風の生活と勉との関係が詳述されている。

第一章 草稿「弟の死」の資料的書誌

第一節 草稿発見と研究までの経緯

草稿「去年のことども」「弟の死」は、三鷹第二資料と筆者が名付けている資料群の中にあつた。

平成になって、露風の資料は二度発見された。最初の発見は、平成二年、三鷹の露風邸取り壊しの際に段ボール箱に入った状態で発見された。これは、霞城館*₁₀と三鷹市芸術文化振興財団が分けて保管している。筆者（和田）は、それぞれの保管場所別に、霞城館資料、三鷹第一次資料と呼んでいる。さらに、平成六年に再び新資料が発見された。三鷹市芸術文化振興財団が保管しているので、これを三鷹第二次資料と呼んでいる。

これらの新資料は、三木露風夫人仲さんが管理されていたも

のを、養子の三木豊晴氏が著作権と共に継承したものであった。「三木露風」の署名があることと、複数の露風研究者の鑑定により、筆跡も露風自身のものであることが認められている。

平成七年三月、発見されたばかりの資料群が、三木豊晴氏から霞城館に送られ、四月開催の「三木露風展」で、新資料として展示されることとなった。それらの中で、数冊のノートと共に、本草稿「去年のことども」「弟の死」は目を引いた。展示に供する資料数点は、露風の自筆のものであることを確認したあと、数週間展示され、再び総ての資料が三木豊晴氏に送り返されたが、気になる数点を紙袋に入れ、別にして研究許可を求めている。二〇〇五（平成一七）年、鳥取県で「三木露風『赤とんぼの世界』が開催され、その基調講演者として訪れた三木豊晴氏と面会し、草稿「去年のことども」「弟の死」の複写を手渡され研究・発表の許可を得たので、ここに新資料の紹介とその研究結果を述べたい。

第二節 草稿「去年のことども」「弟の死」の資料的書誌

草稿「去年のことども」「弟の死」は、松屋製原稿用紙、A4版一〇行罫に、青の万年筆で書かれている。枚数は、八枚。改稿具合から、最初に「去年のことども」という題で、弟の死をめぐる内容の随筆として書かれたものを、「弟の死」と題を改め、同じ用紙に筆を入れて仕上げたものである。（以下最初の「去年のことども」と書き起こされたものを、第一草稿、訂正された「弟の死」を第二草稿と呼ぶ。）

松屋製原稿用紙は、大正八年頃に使用されていたものである。作品は、全集未所収で、『国民文学』大正八（一九一九）年二

三木露風研究 新資料草稿「弟の死」をめぐって

Rofu Milki's newly-discovered essay manuscript, *The Death of My Younger Brother*.

和田典子

はじめに

三木露風（一八八九～一九六四）は、童謡「赤とんぼ」の作者として有名であるが、北原白秋と並び称され、白露時代を築いた詩人である。明治四二（一九〇九）年九月に上梓された第二詩集『廃園』は、同年三月に発行された北原白秋の『邪宗門』*¹と並んで喝采を受け、その後、白秋と露風は、詩壇の双壁として並び立った。続いて『寂しき曙』*²『白き手の獵人』*³『幻の田園』*⁴などの詩集で象徴詩人として確たる地位を築き、フランス象徴詩と日本の伝統的な文芸を融合させた独自の詩風を確立し、『未来社』を結成し、雑誌『未来』を刊行していた。未来社同人や友人による『日本象徴詩集』*⁵の序を書き、一篇の作品を掲載し、露風一派と呼ばれる一家を構えていた。文筆だけで生活する人の常として経済的にはそれほど豊かではなかったが、東京郊外の池袋に新居をなし、詩人としては順風満帆の生活を送っていた。

ところが、大正七年四月、弟の勉から、「病軀を抱いて窮迫せる」という手紙が舞い込んだ。さらに五月半ば、病気が思わしくなく露風を頼って上京したいと言ってきた。この事実は、平成二年に発見された黒革手帳に日記として、四月一七日付け・

五月二〇日付けで記されている。その後、六月に弟を引き取り療養させるが、看病の甲斐無く、勉は九月一六日に亡くなってしまう。

今般、発見された新資料の中にあつた草稿は、この勉の死を踏まえて書かれた作品で、兄夫婦宅での弟の死の数日前の生活、弟が死に臨むその日の様子を描いた短い随筆である。

調査の結果、本草稿は、最初「去年のことども」として書かれた随筆に手を入れて第二段階の「弟の死」と成し、清書して大正八年二月号の『国民文学』に「我弟の死」として発表されたものであることが判明した。

本作品は、しみじみとした家族愛に満ちた胸打たれる随筆として文学的価値の高い作品であるのみならず、露風の詩人としての大きな転機となる幾つかの事柄のモメントとなる人物である弟勉の経歴や人柄、そして露風の弟への愛情を知る手掛かりとなる作品であると思われる。

そこで、本稿では、第一章で、草稿「去年のことども」と「弟の死」の発見経緯と翻刻、第二章ではその分析によって発見された新たな事実を読み解き、雑誌発表作品「我弟の死」との比較によって改稿過程を踏まえた分析鑑賞を行う。第三章では、「我弟の死」の露風作品に於ける位相を明らかにする。